

ふつふつに茶釜の煮ゆる音きゝて柴のけむりに咽ぶ夜やいかに

煤けたる自在じざいの竹のくろびかりたけをつたひて煙はのぼる

吊鶏舎の棲木さむくゆふかけて雌の雄の鶏はならびて眠る(家の土間に吊鶏舎あり)

とまり木に眠らんとしてふくみ音にかけの鳴く音はほそぼそ聞こゆ

ゆふ鶏舎にひそまる鶏はおのがじしおのれふくらみ眼をつぶりゐる

弟との病ひやゝ怠らばとりがなくあづまの園へ早やかへるべし

爐邊二

森の家に病める弟の、病久しくなれば寂しき苦
しさに堪へざらむ。葉書に繪など描きて寄越す、
此程裏の梨の木に、烏瓜の熟れて垂れ下りたる
様を描きて送り來る、拙たなけれど面影しのば
れてうれし。

うす墨のはがきの粗繪かきつたなけれど拙かき
るにまして偲おもばゆ

背戸の簍かに熟れのこる實の烏瓜ゆふ日に照
りて眼にいたからむ

汝が描かきし棚梨の木ぞ枝ぶりのおもしろけ
ればわが眼にはある

あの梨の棚のしげ葉のさみどりに夏日さけ
つつ語りたりしか

穀倉のまへの空地のひだまりに雀あそぶを
見て佇つらむか

ふるさとも霜おきたらむさむしろの敷寝の
床に常臥す汝れを

霜の夜は床摺れのいたみすべをなみ心くづ
をれ涙のごはむ

粉薬を口にふくみてひとりならむ眼の前の
壁に冬の日は闌け(看護人さへ常にあらざれば)

検温器の目盛りよみつゝ裏山に鼻くきく夜の
汝れの心を

縣道のしろき長手に車の音こほりておこる
寒夜もあらむ

○

ゆきすぎてうしろをみればその人もまたう
しろ向きぬ秋風の徑(ある時)

平和第一春

にひじほの四方の海原こゑあげていくさを
さまる年ほぐらしも

177 國をさゝげ獨逸ぐだれり四方の海に時つ風
ふきて年たちにはけり

かゝやかに春は來にけり人の世のいくさを
さまりて春は來にけり

雪ふりてしづもりかへるこの朝け啼く鶏の
こゑの近きにおどろく

しろたへに降りける春の雪の上に朝日さし
照るしづけさあはれ

黎明の死

大正八年一月五日拂曉松井須磨子自殺す

あきらめて生きてはあれど現そ身のなげき
細りてかなしきものを(彼女に代りて)

うつし世は憂きこと多しみづからのいのち
を絶ちて君にいそがむ

唄うたへばふしのみだれて悲しかるわが玉
の緒も絶えなむ如し

戀しけば唄はうたへどうたのふしのあやに
亂れてせんすべもなし

あけ近き死をおもひつゝ唄ふうたのみだれ
し節のかなしかりけむ(以下彼女を憶ふ)

おのれうたふ唄のぬしなるたをやめも身に
つまされて悲しかりけむ

芝居はねてかへる車上に天照るやその夜の
星を君見けむかも

樂屋の壁に挿したる花はしほれたりその夜
の花を君見けむかも

ものみなのだらへるなかに身一つの死なね
ばならぬ命かなしも

はしけやしかけかさねたるむし衾なとごやが
下にさ寝るふたりを

むし衾なとごやが下に寝る靈たまは相寄るゆるに
かなしきものを

春の夜を二つのみたま相會ひぬうれしくて
寝らむ天の足り夜を

よもつ國夜見の月夜に今もかも女男めおとのふた
りは泣きて抱かむ

手をとりにてなにか歎かむ照る月もいや澄み
わたり天あまゆく今は

遠つ世にありけむことか今の世のかなしさ
ならず君のゆけるは

おもひあまり死にける君のいぢらしさ心ひ
とつをかなしむ我は

二十日あまり時たちにけり君逝きてきみが
名たかし時たちにけり

くすり湯

くすり湯にひたりてあれば屋根の雪なだれ
落ちたり庭もとゞろに

手にとれば粥の茶碗ゆ立つ湯氣に眼鏡くも
りて春未だ浅し

山かげは草生ふる遅し薄れ日の小沼水錆び
てをりをり曇る

風おちて夕空さむし鐘の音のわたりてひ
く冬木枯原(大井谷垂にて)

さみしさに火桶抱けばもえさしの炭火の灰
のくづれておつる

本讀みて夜はふけにけりあたらしき炭圍い
けさせ今は寝んとす

隣家に夜なよな吠ゆる犬の聲も春めきて今
はやさしくきこゆ

農村講演會

大正八年二月二日靜岡縣下小泉村に於ける農
業組合講演會にのぞむ

せんねんに鳴りをひそめてきくゆるにわが
いふ聲のおのづから高し

あるものは眼みひらきかなしらに我れを目
守りて動くともせず

あるものはうれしきならむ時をりに手を拍
ちはやすわれの言葉に

こゑあげて語りはしつれおぼつかなわれの
言葉のことわりに落ち

講演ををはりてかへる田圃道ふりさけみれ
ば雪の富士が嶺

道の上に霜凝る音のわがゆくにかそかなれ
ども土よりおこる

組合の内輪のくるしさをかこちつゝ我を送
りくる若者ふたり

若者よ手火さししめせこの道の泥濘にわれ
は行きなづみたり

ひやうひやうと松風さむし霜の夜の街道を
いそぐ我等の足音

會長のをしへ守りて村にのこり駿河の小田
をたがやすといふ

うしろ向きて風をよけつゝ外套の襟を立て
たり板橋の上に

樗牛の墓に詣つ

其夜は興津に轉地せるN君をたづね、翌日相共に龍華寺に赴く

友として朝ゆく道に雪はのこり小田の長路
にさす日の影を

かぐろ葉の椿の花を眼のまへに見つゝしの
ぼるこの石徑を

この丘にかなしき靈^{みたま}ねむるゆるる思ひふかめ
て石の徑のぼる

うつし世のいのちはかなしかたはらの椿の
花を手向けまゐらす

曇り日のさむき御墓ををがみつゝ吐く息ほ
そしこの山かげに

ありし日の御顔知らねばこゝに来てわがを
ろがむと知り給はざらむ

大理石だいりせきに名におふ言葉彫りたれば花手向け
つつ心うつゝなし

おん墓むらに水をそゝげば黄土こゝろしろく日影うす
れて曇るさむけさ

ひたぶるに君が名慕ひきみが文字讀みにし
ころの吾れがかなしき

ぬかづけば夕凝る土に日かげうごきわが吐
く息のあやにしろしも

寺山の丘にわが立つ真下より冬田つゞきて
あからさまなる

おのづから三つに分れて寒き洲の穂にづる
ゆるに三保といふとぞ

海の上に雪をかづける群山のその名をきけ
ど誰も名を知らず

雲間よりさす日まちつゝ蘇鐵の前うつしる
撮るとわが立ちにけり

かゝやかに清水の町の家並みしろく雪をか
ぶれり春浅みかも(清水港)

このねぬる朝の目ざめに硝子戸透き田子の
浦浪ひるがへるみゆ

この宿に春をまちつゝしづこもり蜜柑むく
べしあけくれに幾つ(水口屋にて友に)

峽の雪

ゆふ波の磯居る舟の艫に立ちて子供手をふるわが汽車にむかひ(由比を過ぐ)

山頂に晴れんとすなる白雲を目守りつかれて幾驛は來し

頸窩（喉のくぼ）の痛みこらえて窓の外になほ見るものは雪の富士が嶺

山峽の雪照る道をわが汽車はまがらんとして汽笛（汽笛）ならしたり(山北附近)

窓にせまりてはれたる雪のはがらかさ我れの眼に涙たまるも

裾野かけてふりたる雪の照る明さ眼にある
 ほどはみな光りたり

みはるかす雪の大野ににじみつゝぼつつり
 あかし家の灯ひとつ

餅

はるばると兄がおくりしこのもちひ海山越
 えて今朝つきにけり

小包のかたきむすび目ほどきつゝわがおも
 ふことはふるさとの空

ふるさとのうからやからがあつまりて揚き
けむ餅ぞこの粟の餅は

郵税は餅の値よりは高からむこの兄のこころ
忘るべからず

今しがた子等去にたらむ校庭に揺りのこさ
れし遊動圓木(或る時)

西の樹空

大正八年作

大正八年八月藤王樹創
刊より九年一月まで

緑の朝

露おもく垂れたる枝はみどり葉の陽に透き
て光る朝雨過ぎて

205

雨あとのすがしき光木々を傳ひ小庭あかる
く 茨竹桃は咲けり

朝みどり土にふりしくはれやかさ齒をみが
きつゝ佇ちて久しも

しら萩は朝のしづくにみなぬれてうねりお
もたく地になびきふす

檜林のみどりの影は庭にしきむぐらの塚を
そこに見つけたり

盛り上りいまだ崩れぬ土鼠の塚苔をやぶり
て土あたらしき

萩の葉におきたる露の光りつつすべらんと
して堪へある清しき

あさつゆの光の中につつましく葉と葉寄り
添ふ言かはすがに

しつとりと苔ひす土に散る光濡れ伏す萩の
露はこぼれつつ

人の世のなげきは知らずしら萩の窓にせま
りて咲きみだれたり

うなかぶし地に伏す小萩風ふけば起きかへ
りつつ露のたま零す

犬の子

歸りきて靴紐解きをれば犬の子がけさ生れ
たりと妻は告げに來し

やすらかに子は生れたりとわれに來て妻と
妹がこもごもいふも

すこやかに生れてあれど日の光いまだみえ
ねばたゞに鳴きある

ふところに小犬を入れて歩りきつつ未だと
とのはぬ鳴き聲きくも

親さびて子をもる眼つきおのづから母とな
りにし親心あはれ

夜の向日葵

灯にぬれて咲きたる花は向日葵の輪くさや
かにかたぶきて高し

灯かげあかく照りいだされし向日葵の花の
ひかりは動くともなし

おもひくしわが立つ前に窓の灯のとゞくか
ざりは向日葵のはな

幅廣にさす灯あかるし灯にうきて照り美し
夜のひまはりの花

遠人にたより書きつゝ窓の戸に穂に出る草
をあはれとおもへり

良心

みじか夜のうまいたらひて目ざめたる庭の
諸木に鳴く小鳥多し

英竹桃の花は散りたり朝起きの今年の我れ
は頭おもからず

大空に澄み照る月のかげ清しわれの心をさ
ながらに見よ

あたらしき書讀み了へてふるさとに送らん
とするに弟はあらず

よみがへるいのちうれしも手の甲に静脈の
血の青みながるゝ

ほの青みわづかにうごく静脈のおとをよみ
つつ歌おもひをり

てのひらの皮膚のうづまきほのあかみ灯に
翳したればつややかに見ゆ

渦巻きの指紋のきめのこまやかさしみじみ
いとし照る灯のもとに

うつつなくわが静脈をかぞへつゝこころう
れしも夕庭に向きて

脈搏のたゞしくなりてこの夏はわれのこゝ
ろのひたぶるにうれし

すこやかに身はなりつれどふるさとに會ひ
にゆくべき父母はまさず

うつしよのこのかずかず思ひすててなご
む心のやすけしも今は(ある時)

いきどほる心なごみて今はわがおのづから
なるやすけさにゐる

わが心いまは和めり立つ露のいや蒼くなり
て木は葉をおとす

さかしらと人はおもはむたゞわれのそこの
心をわれは偽らず

ものいへば悔ひ心おほし道理のすぢはかに
かく黙あるに如かず

いきどほる心に今はたへがたしわらひて行
かむ人の世の道を

月夜に

しめやかに部屋にさし入る月影の光まさぶ
し障子をあけて

うつつなく灯に來し蟬おもはゆげ露うごか
して青き疊に

秋さびて蟬をにぎる疊のうへ木かげさやけ
し月のあかりに

灯のもとに蟲を押へてくすばゆしわが掌の
下をたゞに這ひありく

すゝろかに髭ふるはして啼く蟲のあはれに
みえて秋の背は浅く

月照らす庭木の木立くろぐろと網目こまか
に地にしきてさやか

群立ちの檜を洩る月の影をくろみ枝にあた
りて落ちたる蟬あり

はかなさを堪へてわが見る月の樹にあなこ
ころぐし夜啼く蟬を

垣の外をわかき異人のふたりづれ語りつゝ、
ゆくこの月の夜を

垣間透き人かたりゆく足どりのかろがると
して白き靴穿き

語らふは戀しきならむ手をとりにて木蔭の道
を行きまがりたり

月照らす千草あかるし庭の面にむつみいが
める小犬のけんくわ

名をよべばけんくわをやめて我れに来る小
犬ふたつを月夜の庭に

丘の下を池上にかよふ道ひろし月の夜ふけ
て車の音おこる(池上は村の名)

ふけの月に道幅ひろみさよふけて街道にお
こる車のひらき

この月にたより書きたくなりにつけりたより
書くべき弟はあらず

月の夜もいまは更けたり灯をけして雨戸繰
る音をちこちに聞ゆ

身邊近事

あわたしき幾日過ぎけむ目につきて木の
間の秋は星明りせり

義母義弟、朝鮮より來たりて神田明神
下に小間物店を開く、大和屋といふ。

あたらしき店を開くといでて行きし妻をま
ちつつ歌選む我は

母と子が店にすわりておぼつかな街のうへ
にはせはしき足音

こまものの店をひらくと棚並めてかざしは
おきつ秋の灯のもとに

かけかざるりぼんの下に母はすわり街の往
來をみてゐるならむ

故郷なる兄打ち續く不幸の後に一子を
擧ぐ、男兒なり、實と名づけしとぞ。

うれしもよみのる生れてほとほとに絶えな
んとせし我が家泰し

魁がへる血統まかなしうつそ身のいのちお
よそにわが見るべしや

秋の夜はながくもなりぬ兒を抱きてわれの
噂をしてゐるならむ

やうやく家買ひて大森の住民となる。
人のなまけのたよにうれしく

家買ひてさすがにうれしあきぐさの庭にお
りたつ曉起きを

この朝けはや起きたれば裸足になり朝露の
庭を掃きにけるかも

繁りあふ檜葉は刈りこみ萩はうつし狭庭あ
かるくなりけるかな

まづしかるわが世に生きてまごころの人の
なさけのたゞに有難し(玉夫人に)

みやこべに送らんものと汝がうから秋日う
れしみもぎけむ柿か(越の六郎より柿を買ふ)

柿の實はつぶらに赤し秋の夜の灯に照りた
ればつやゝかに見ゆ

はるばると越の國よりおくり來しこの柿の
實はたゞにうましも

この柿はあまりにうまし秋の夜をたゞにた
うべて腹ふくれたり

蔓橋

舟をすてて岸にのぼれば島人の墓あらはな
る月夜なるかも

手をつなぎ子らがうたへば一つづつ夕空に
星が生れいでにけり

かぎろひの樹空をかへる鳥のむれ谿にあふ
ぎて蔓橋を越ゆ

半島の空夕焼けてあかねさすひかりの中を
なきゆくからす

おほどかに日はくれにけり夕河岸にあそぶ
子供はみな手をつなぎ

枝川の流れよどみていりつ日にめぐる水車
のきしみかなしも

海苔粗朶に寄る波さむし雪ぞらの低くかぶ
さりて濁れるいり海

8

兄の死

大正九年作

大正九年二月より
大正九年十月まで

寒 潮 滿鮮行歌 一

社命にて大正八年十一月十日より朝鮮滿洲北支那
の視察に赴く、われ西の國に生れたれど對馬海峡を
わたるはこの時がはじめてなり。

海峡をおとす潮はやし小夜中と夜はふけに
つつ眼まなこいやさゆる

237
船はいま瀬に入りたらむ目ざめゐて波のう
ねりの高きを感じず

夜はふかしわが隣室の灯のかげに札切る音
のかそけく聞こゆ

圓窓ゆ照りこむ波の朝あさ光ひかりに寝ざめものうき
潮あかりかも

圓窓ゆ汐照るつよしうつぶしの吊床ぶとのしろ
きに眩暈をおぼゆ

寝たらはぬわが眼にいたしかあてんの縁を
透きて朝夕のひかり

目ざめてはまづ見る朝のうしほ波うねり照
り返すわが行く船に

鳥かげは風吹く弱し寄りそひて釣りする小
舟かたまりて見ゆ

240 照り翳る雲間の光り落ちなづみ島にあたり
てさむき波の面

岩の間にたたへふくらむ潮の面のかすかな
れども片時明るく

眼のまへの赭き島山北向きに風吹きあてゝ
草木を生せず

港入りまづ見る陸の鮮人の群れ往來せはし
きその白服を(釜山入港)

塵あげて道行きいそぐ白衣のひと女は魚を
みな頭にのせて

241 山裾に家居あつまる鮮人の村朝餉たくらし
煙のぼるも(港の對岸に鮮人部落あり)

海尻は潮にくもれり相寄りておのがじゝあ
ぐるほそき煙を

行く雲のをりをりおとす日かげさむく岬の
松に鴉は啼くも

屋上の庭樹にかげる冬の日の雨もよひして
わが眼にさむし(釜山ホテルにて)

曇り日は雨となりけり北行きの汽車をまち
つゝたよりを書くも

猪山の裾並みめぐる箒木の片面あかるみ降
り来る氷雨(北に向ふ)

うしかたの鮮人ハひきなづむ石坂の乾ける道
に氷雨はしぶき

朱泥光

朝鮮行歌二

岩山に生ふる木もなしすぎまじく山の骨いでて眞裸にみゆ

禿山の赤はだかなる山肌にうすれかたむく西日のひかり

曇り日の空をかざりて立てるやま山壁の谿にかゝる岩多し

窓にせまる赤き山々眼をあげてくづれし岩の多きにおどろく

夕光に映洲のかわきいちじるく河床の道は土手より高し

山裾の驛のかたへの田は昏れてたがやす人
にしぐるゝ氷雨

夕雨につかれしならむ一枚田たがやす田子
は牛を叱るも

すちいむの暖やゝ強し向き直りてみえぬ眼
鏡のくもりを拭ふ

心寒むき夕の汽車かもとりいでし時計の針
のとまれるわりなさ

もの買ふと窓をあくれば鮮人の子が窓に寄
りくも提灯をつけて

釣銭をかぞへて去らぬ子の横顔砂利の上に
おとす灯りは寒く

開鐵橋

滿鮮行歌 三

夕かけて鴨綠江の大鐵橋を安東より新義洲へ
 渡る、結氷せる大江の水に夕雲の影おち、橋を
 ましる日本兵の警戒ものものしく、寒風氷河よ
 り至る。

川口の空夕焼けてただならぬ雲のけはひの
 氷の上に動き

外套の襟たてゝわたるくろがねの長橋にし
 て霧に逢ひたり

われをのせて引きゆく苦力の辨髪の背に揺
 るる見つゝ鐵の橋渡る

橋梁の鐵骨のかげ橋におちて霧ににじめる
 赤き灯小さしも

名にしおふ橋をわたりにて疲れたり乾ける空
 氣を喉に感ずる

橋杭にくだけながるる氷の音ゆゝしく鳴り
 て足の下におこる

しろき息吐きつゝわたる鐵橋の下は見る眼
 のかぎり氷はりたり

霜凝る開鐵橋の道ますぐいまわがわたるし
 ろき息吐きて

この橋はこゝに断たれて船やると指す邊に
 立てり川を瞰下ろし

氷原の中ゆく水にうかぶ氷のながれかへす
 は潮滿つるならむ

さす潮に押ししかへさるる氷の岩のかたみに
打ちてくだくる響き

氷原ゆひた吹きあぐる風つよし橋まもる兵
のひたむきのこゝろ

そらの月暈してさむし夜をこめて橋もる兵
に蒼き霧はふり

彼等は踊る 浦鮮行歌 四

ハルピンの一夜友につれられて東清鐵道俱樂部
部に露人の踊を見る、若き男女の集るもの二
百人、舞踏は夜十二時にはじまりて曉に及ぶ。

街の家は雪に埋れり雪の夜ををどりあかす
とつどへる人々

百あまり幾組ならむ灯のもとにをどる踊り
の足並みそろひ

合奏のうたにあはせてつなぐ手をかたみに
取りつ放ちつするも

長身の騎兵をとめの腕をまきくるくるとま
わるその足のさばき

つと抱きつとはなちする人のからだ背せなを合
せてまた向きなほる

いちにんの見知れる乙女踊りつゝ群にまじ
りてわが前を通る

通る時こちらむきしがつかのまに遠退とほざきに
つゝ手をとる踊る

手をひきてくるりと廻るうしろよりまた踊
りくるふたりの踊子

伴奏のうたおもしろし唄にあはせ足どりか
ろく彼等は踊る

戀しきは戀しきどちと手をとりにてをどりを
踊るをどりを踊る

ごうらずはどよみふくらみ踊る手の酣にな
りて雪ふりしきる

廟域のしろく乾きし庭土に槐アハヒの木かげあら
はに落ちて(北京喇嘛寺)

喇嘛の子のひとり遊びが眼にいたし砂いぢ
りしつゝわれに見向かず

もごりかの佛はかなしあかねさす晝を抱き
ておはしけるかも(移佛)

又銃して兵はしづもる夏草の片岡を越ゆる
 明るき雲あり

○

潮落ちてゆうべしづもる濱庭に鶏をあめて
 餌をやるわれは

兄 一

三月二十四日姉危篤、兄亦病重しとの飛報來り
 先づ妻を國へやりしに三日にして更に兄の重
 態を報じ來る、大正六年父母共に逝き、翌年二人
 の甥死に、昨年弟にわかれ、わがためには唯ひと
 りの肉親なり、取るものも取りあへず歸國の途
 につく。

兄死なばわが家の血すぢ絶えぬべしひとり
 の兄を死なしむべからず

くさぐさのこと思ひいで病みはそる命をも
ちて兄はまちをらむ

まちわびてありとおもへば村肝のこゝろく
づをれせんすべもなし

かくしつゝわが行くものを生きの身の命を
もちて吾をまちてをれよ

うつうつに兄をゆめみて目ざめたる船室の
夜半の洋燈の明り(宇和島夜泊)

涙を胃して船漸く故郷の港に入る

棧橋にくだるすなはちわが兄の生きてある
かと人に問ひにけり

山々は青くけふれどうれひもちていそぎ行
く眼にくもりてみえず

幌をうつ雨脚はやし晝ながら小田の蛙をさ
ゝつつゆくも

このあたり見る山々はみなしたしと思ひつ
つまがる山裾の道を

かへりくる學校がっこうの生徒みちのべに車をよけ
てわれを見送る

家に着く、雨漸くやむ

服脱ぐと縁にすわれるわが前に名をしらぬ
子がつぎつぎ来て立つ

こころおそれ室にとほれば姉もろとも病み
ふす兄のをとろへしるし

かへり來しと妻がつぐれば眼をあけてわれ
をば見たり何かいふがに

ふるさとの青山の木々に花はさけど兄をみ
とりて心はくらし

ひさにして春に來しかどふるさとの生れし
家に兄と姉はやみて

やうやくに何かいひしがこみあぐるせはし
き呼吸に苦しむ兄を

なまぬるき風吹きゆけり散薬を水にとかせ
て兄にすゝむる

やすらかに目ざめにければ前畑の青葉見す
ると枕かへさす

ふる雨に葩^{ひら}面伏せて咲くはなのそら豆の花
はかなしき畑に

前畑の青きを問へばやゝありて蠶豆のはな
と兄はいふかも

けさみれば心氣^{しんき}のつかれ眼にしるし命生か
さんすべなきか今は

みやこより薬をもちて來し我ぞわれにひと
りの兄なるものを

そら豆の花はさけどもさく花の實となる日
までながららふべきか

よべよりの吃逆^{くわいさか}やみたり眼をとちてつかれ
しならむ今は眠るも

妻當才なる寶を抱きて仰臥せる兄の顔の前
につれゆく

子が笑へば兄も笑へど眼のいろのかなしく
なりてわれは笑ひ得ず

抱き上ぐればいやゑみまけて死に近き親と
しらぬがかなしかりけり

戸に来ておとなひくるる人の名を試みに兄に
問ふに正しく答へければ

戸に立ちてみまへる人に眼を向けてその名
をよぶに心やゝやすし

ねぶたさを堪へて夜あかすわが耳に裏簀に
風のわたるさびしさ(みとりて夜を徹す)

おのづから折りたく眞柴今はつきて兄の寝
入るころ夜はあけにけり

兄
二

薬とりに村の醫者に行く、わが家より縣道に至
る間は椎山につよく簀かげの坂道なり

薬もちてかへる夕べの簀かげ道坂のなかば
に呼吸つきあます

見上げたる梢の花のにはひあまし薬をもち
てかへる椎の道

そこばくの赤き錢もち酒買ふと父のつかひ
に行きにしこの道

鯛の汁を欲しといふに急ぎ買ひ来て之れを煮
る、煮ゆるをまたで兄遂に逝く

たやすくは鍋の鯛煮えず柴の煙にしばたゝ
く眼の泪をかくす

たゞならぬ部屋のけはひに心おそれ煮る手
をやめて座敷にとほる

くるしむ胸たゞにおさへて名をよべど腫す
わりて我あるを知らず

おちいりてかろくとちたる眼^{まなこ}の目^め脂^{あぶら}の垢^{かたまり}
をのごひまゐらす

枕^{まくら}べにうからあつまり名^なをよべど死^しにたる
人のまたかへるべしや

葬儀の日に

ふたゝびは見るをりなけむこれの世の面影
とおもひ棺の蓋とりつ

合掌してしづかに寝たる兄の顔たゞにまも
りてわが眼のいたき

いまはとて釘うちたれば姉をかこみねに泣く
 聲の家ぬちにおこる

實に位牌を持たせ、われ實を抱きて棺側に従ふ、
 あはれがりて人皆泣く

いま行かす父をおくるとわれに抱かれみる
 るは泣くもみな人の泣くに

抱かれて位牌はもちつ御供すと庭にいづれ
 ば泣きやむみのる

天蓋の金の鳥の羽竹やぶの竹にふれつつ棺
 坂をくだる

葬儀畢る。その翌朝

にくしんは死にたえにけり現し世にちゝは
もなしはらからも今は

親なしに吾子はもあらずはらからもみな死
にたえてわが世さぶしも

今ははや兄なき家にひとりのこり心くづを
れりたりけるかも

つぎつぎにみな死にゆきし家にかへり洋燈
をとぼす夕べ寂しも(外出よりかへりて)

よごれたるほやをふきつゝかへりみて姉に
やさしき言葉かけにけり

ゆふぐれはさぶしきものか庭の樹のそよげ
る枝をしばらく見てゐし

實の誕生祝ひに兼ねて兄の四十二の祝ひをせ
人と約せしことも今はむなしく

五月のぼり草餅も搗き祝ぎ酒をともに酌ま
むといひてしものを

めたらしき家を建てんとかねごとにいひて
しものをすべもすべなさ

年祝ぐとかねてのこせし酒のしろはふりの
しろとなりてくやしも

年ごとに人死ぬゆゑにふるき家の生れし家
をこぼたんとおもふ

・ 或日の夕べ道にて

馬ひきて野良よりかへる若者にくやみいは
れしが名をわすれたり

わかれつゝ家路いそぐと道したの田に立つ
人と何か話しあふ

初七日をすませて大森の家にかへる

ふるさとに兄をはふりてかへりたりかへれ
る家の花みな散りて

あきらめてあり経るものを何しかもわれの
心のおちゆくかなしさ

幼なければみづから知らず風邪やひかむ胃
やそこなはむ心せよ子に(故郷の姉に)

うつし世はかなしきものを離居の馴れてす
ごせし昔くやしも

あからひく春日のなかに咲く花のさくらの
花も何せむに今は

大正十年二月廿四日印刷
大正十年二月廿九日發行

地價
定價貳圓

著者

橋田東聲

發行者

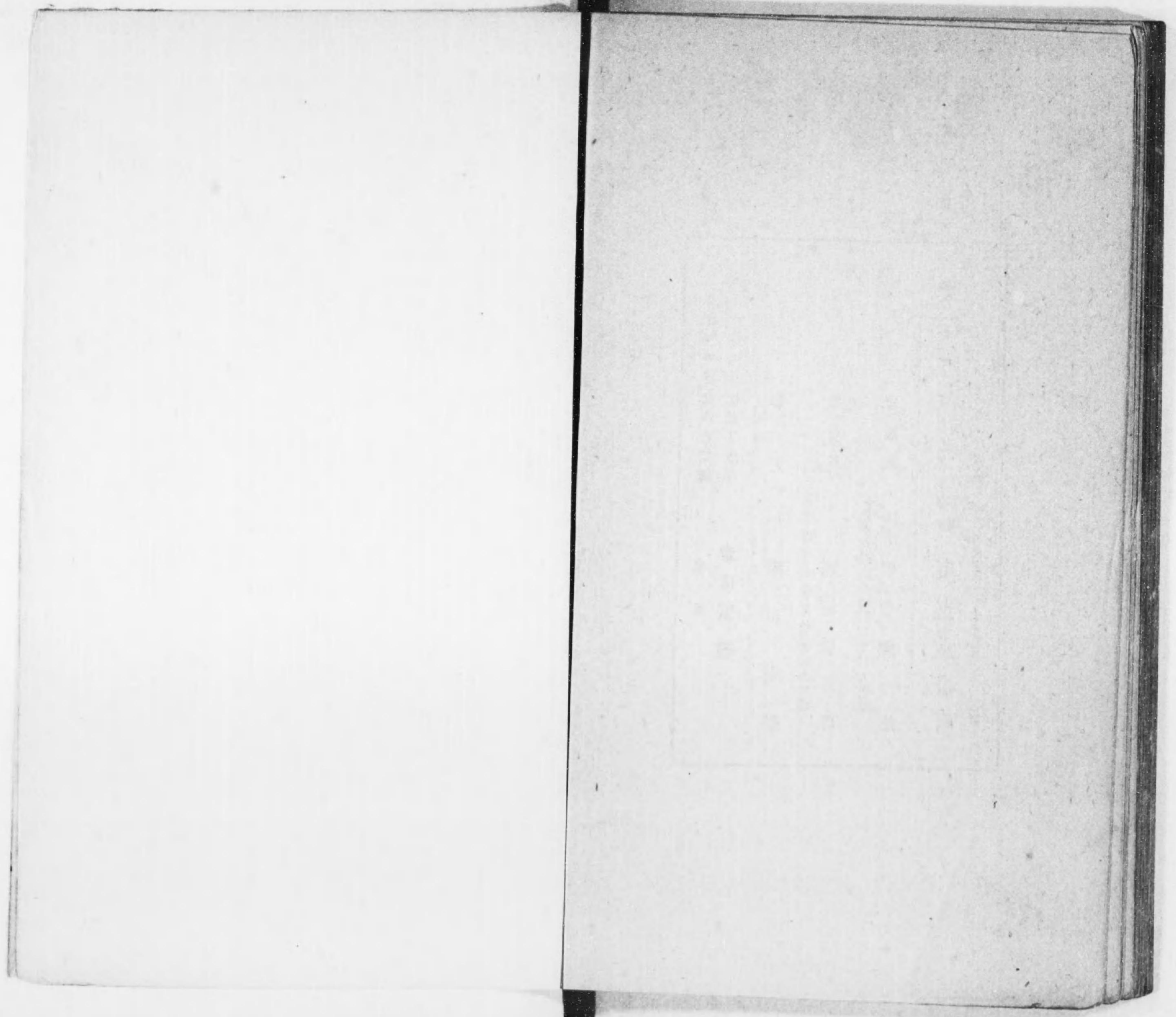
東京市日本橋區檜物町九番地
西村辰五郎

印刷者

東京市京橋區長崎町二丁目九番地
田中金一郎

發行所

東京市日本橋區檜物町九番地
東雲堂書店
電話本局一八七一番(振替東京五六一四番)



122
501

終

